

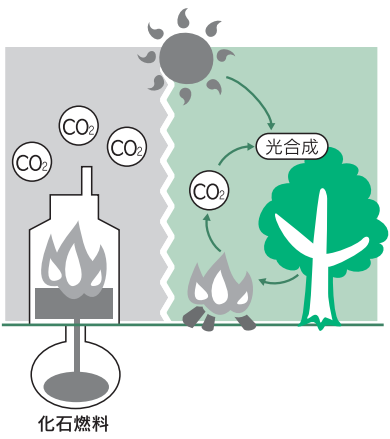


なぜ今バイオマス？

バイオマスは、動植物と太陽エネルギーがある限り、持続して再生可能な資源です。また、バイオマスを燃焼したり分解したりして放出される二酸化炭素は、もともと生物の成長過程で光合成によって大気中から吸収したもののなので、バイオマスを使っても、地球温暖化を引き起こす二酸化炭素が増えることはありません。

一方、石油などの化石資源は限りのある資源で、21世紀中にも枯渇してしまう可能性があります。

私たちの生活に必要なエネルギーを生み出すために、石油などを燃焼させることが、地球温暖化の最大の要因となっています。これらことから、化石資源からの転換が求められるようになり、バイオマスが注目されるようになりました。



松前町ではこんな取り組みが進められています



Case 1 ひまわりの種から油を採る

松前町は、えひめバイオマスパロジェクトのモデル町として、平成18年度に、町花ひまわりを栽培して種から油を採り、燃料などに活用する松前町バイオマス推進事業を開始しました。

当時、ひまわりの栽培は「NPOいよ環境センター」と「松前町まちづくり塾」が行っていました。約5反の畑でできたひまわりの種から採った油で、900個のひまわり石けんを作り、町内の学校に配りました。

その後、東古泉地区も栽培に参加し、遊休農地を利用してひまわり畑をさらに拡大しました。

昨年度は、町内合わせて10反の畑から139リットルの油が採れました。

採れた油は、保育所の給食や、文化祭でのポテトフライなどに使用し、その廃食用油をバイオディーゼル燃料（BDF）に活用しています。

平成20年度ひまわりの種 収穫量・搾油量

地区	作付面積(約)	収穫量	乾燥後収量	搾油量
西古泉	3反	242kg	126kg	26ℓ
中川原	3反	334kg	209kg	42ℓ
東古泉	4反	730kg	325kg	71ℓ
合計	10反	1,306kg	660kg	139ℓ

※ 1反=1,000㎡

遊んでいる畑がゼロになるように！

基本的に中川原地区の住民全員が会員というNPOいよ環境センター。ボランティアとして、みんながやれることをやるという意識で、ひまわりの栽培をはじめ、ひよこたん池公園の維持管理、河川の水質保全、資源ごみのリサイクル活動などを行っています。

代表の本田真一さんは、「会社で環境関係のことを勉強していました。退職後は勉強したことを地域でやろうと思い、NPOを立ち上げたんです。中川原には、環境についての知識が豊富で意欲のある人がいて、知識・経験・人材全てが上手く揃っていました。おかげで今の活動があります」と話してくれました。ひまわり栽培は15年目となり、平成12年からはひまわりが見ごろを迎えるころに「ひまわり祭り」を開催しています。

「みんなこの祭りを楽しみにしていて、町外からも大勢の人が参加しています。遊休農地を活用して、コミュニティ形成、美しい景観作りができていますと実感できます。今後は、ひまわりだけでなく菜の花や環境にやさしいケールも栽培したいと考えています。そして、中川原では遊んでいる畑はありませんと言えるようにみんなで環境のための取組みを続けていきます」



NPO いよ環境センター 代表 本田真一さん